三友国五郎氏の逝去を悼む

三友さんは昭和4年京大文学部で地理学を専攻することになった級友である。御逝去の報に接し洵に哀悼に堪えない。若かりし日の三友さんを回想してその人為や初期の御業績の一端を紹介し，故人をしのぶよすがとしたい。

学生時代の三友さんは全く辺幅を飾らない質実素樸な野人であった。べらんめい調の話し振りで，その名前からは関東の親分が想像されるかもしれないが，根は非常に心やさしい人であった。京都北郊の一乗寺の尼寺に下宿されていた。同宿の学生達は若い尼僧の修業の邪魔になるというので追い出された。三友さんだけは庵主の老尼僧の信任が厚く残留を認められた。しかしやがて自発的に山科に転居されることとなった。我々が手伝いを申出たところ既に前夜引越されたという。夜具を大風呂敷に包んで，それを担いで10キロもの夜道を歩かれたとのこと，犬に吠えられて困ったよとの述懐に一同感じ入った次第であった。三友さんにしてみればテントを担いで秩父の山を何日も放浪された経験から，平地の町中の夜道など文字通り朝飯前のことであったろう。

我々の卒業は昭和6年不景気の真只中で，教育界もその影響で就職難であった。同期の考古学専攻の有光兄（現在橿原考古学研究所長）の御尊父が福岡県の名門東筑中学の校長をされており，会息が卒業された御礼に京大から一人採ってやろうとの思し召しで，たまたま私が九州出身であるというのでお話をいただいた。私はしばらく大学に残ることにしていたので，三友さんを伴い有光校長にお願いに出て私の代りに三友さんを採用していただくことになった。三友さんの九州との因縁はここに始まったのであった。

三友さんは授業の傍ら，遠賀川流域を中心に北九州の海岸線の変化についての研究に着手された。自然地理的考察に貝塚の考古学的資料を援用され，小牧先生の先史地理的研究を継承されたものであった。当時京大地理学教室から刊行された『地理論叢』第二輯（昭和8年）に掲載された。さらに第四輯（昭和9年）には「筑後川流域平野の溝渠網について」を発表された。この平野の開発について私は卒業論文を書き，その要略を「史林」に発表したが，三友さんはさらに精査され私の説いて詳らかでなかったところに新たな考察を加えられた主として歴史地理的研究であった。なお，六輯（昭和10年）には地元の「筑豊炭田」について産炭量の推移，送出先，炭坑と人口など経済地理・社会地理的考察を行われた。

三友さんはその後平壌師範に移られた。私は戦前平壌に三友さんを尋ね一夕歓待にあづかり，翌日は乙密台などの名勝を案内いただいたことが昨日のことのように思い出される。

戦後引揚げられてからは埼玉大，鹿児島大などで活躍されたことは衆知のところである。昭和30年代に私は条里遺構の全国集成を企て三友さんに関東各地の条里について執筆をお願いした。その玉稿をまだ筐底に蔵している。御生前に出版に至らずなんとも申訳なし。何時の日かこれをなしとげ墓前に捧げることができるであろうか。　　**（米倉二郎）**

この2～3月の学年末休みは大学時代の思師や先輩，同窓等の逝去が相次ぎ，人生古稀に近い年頃の淋しさを味うとともに，私の場合三度目の大学における最年長教授でありながらも，ゼミ学生の追出コンパに出席，よく飲み，よく騒ぎ，未だに枯れきれない自らの人格のさがなさを感じる昨今である。とりわけ学問領域で親しく指導を得た考古学の思師梅原先生，人類学の金関先生，地理学の三友教授の相つづく死去はわが既往45年の研究生活への追憶を蘇らせた。

三友教授は昭和6年京大史学科で地理学専攻卒業の歴史地理学者であり，鹿児島師範から戦後鹿児島大文理学部教授をへて，埼玉大教授を定年退官後，再び鹿児島女子短大教授となられそれも終られた。

先年夫人に先立たれ，再び大宮市に帰られ，本年3月1日逝去せられた。同氏は沈思黙行，名利に恬淡とした人格をもつ立派な学者兼教育者でもあり，この点では氏の京大での後輩にあたる七高出の兼子俊一教授（元大分大学）に似ている。昭和6年といえば，ほかに地理学では米倉二郎教授が佐賀出身であり，考古学専攻卒業の有光教一教授もやはり北九州の方で，日本考古学協会員でもあった三友氏とは親しい間柄であったときく。1904年生れであり78歳であった。私個人が小柄なこの三友先輩に直接お目にかかったのは，拙著『地理学の旅』中に書いた昭和24年夏の立命大地理学科学生引卒のゼミ旅行時だと記憶するが，もとより先史地理学の先達であることはそれ以前から知っていた。指宿温泉での中毒（？）事件で，当時引率教官としては山口平四郎教授の他に，助手だった樋口節夫君が一緒だった。親切にも鹿大に我々を案内され，医療手当をして下さった教授の御親切は生涯忘れることは出来ない。過日山口さんに電話し，三友さんが浦和高校の出身で山口さんの先輩に当たることを知った。関東に移られてからは主として1958年の「埼玉大紀要」にみる「薩南諸島の先史地理調査」のほか，同60年『歴史地理紀要』II中の「縄文中期の集落」等，先史地理関係の論文が多いが，『京大地理論叢』第4輯（昭和9年）に書かれた「筑後川流域平野の溝渠網について」の論文は，じつは歴史地理学者として最初に手がけられた〝環濠集落論〟でもある。私は今頃になって米倉教授が華南のクリークを問題にされたのは当然としても，この三友論文が佐賀県出身で，旧制浦和高校教授でもあった故内田寛一先生の影響があったのか否かも問いたださなかったのを残念に思う。また三友さんは翌10年北九州の中学教諭時代に同論叢に「筑豊炭田」を執筆，この頃の住所が故三森定男氏が主宰し，浜田教授が顧問だった「考古学論叢」の会員名簿に掲載されており，お名前はよく知っていた。かくて金関，有光，三友，三森，織田，米倉等の京大史学科の育ての親たる浜田，小川，石橋各教授下で育成された考古，人類，地理学者とほかに金関教授下で南方の民俗研究をやったやはり京大史学科国史学専攻の国分直一教授等がお互いに関連がありそうであるが，多言の私とは反対の三友さんはこのような学問の系譜や学者間の人脈については話されなかった。私は上のほか，関東に転職されてからも東上毎に，しばしば上野の学術会議場でお目にかかった。その目的が科研費のことなのか，創立間もない歴史地理学会のことなのか，或は日本考古学協会のことかが明らかではない。それよりも三友教授との関係は，昭和13年卒業後大学院に入学して間もなく，当時指導教官だった小牧実繁教授に呼び出され，楽浪古墳群のある北鮮の平壌（現在のピョンヤン）へ行かないかの話があったことである。ところがこれは北九州の中学から三友さんが赴任された。当時考古学教室の副手でもあった私は，それを辞退したわけであるが，同じ小牧先生がその後京都の同志社中学の地理の教師をお世話下さった。ところがその翌年同志社中学ではここ出身の梅原先生の講演があり，翌昭和16年私は先生にお伴して，はじめて朝鮮半島に渡り，京城(現ソウル)で，有光技師にお目にかかり，ついで平壌にも行った。なき藤田亮策教授にもこの時お目にかかった。私事にわたるが，もう一つ，立命大から京大に転出の頃，二三の旧制高校の教師の話を父と親しい鳥取県出身の当時文部省の督学官をしていた米原穣教授からいわれた。その一つが浦和高校で人口地理の武見教授の後釜との話，しかし，三友教授はこの時鹿大に居られた筈だと新旧制の変化を頭に浮かびあがらせた。じつはこの原稿執筆前私は大隅半島から思い出の指宿温泉に行き，西鹿児島でかつて関大地理学科の非常勤講師時代に教えた平岡昭利氏にお目にかかった。氏の車で空港に行くまで氏が三友教授の勤先だった

鹿児島女子短大の後任であることもこの時はじめて知った。学問の系譜にはやはり人脈を無視出来ない。私は三友教授とともにいま〝歴史地理学の二元性〟を論じられた内田寛一教授のことも想い出し，もう１度米倉先生をまじえて，これらの人々と京大歴史地理のことを話しあいたかった。　**（藤岡二郎）**

〔本学会でのご活躍〕

1958～65年度　委員

1966～71年度　評議員

その間，常任委員４期併任